

和光市景観計画等検討委員会（第2回）

議事要旨

日 時：平成20年11月13日（木）17:00～19:00

場 所：404会議室

出席者：山中知彦（委員長）、本橋淳男、富岡征四郎、鍵和田美津子（副委員長）、松田廣行、渡辺佳雄（敬称略）

事務局：大寺建設部長、荒井建設部審議監、小池、加藤
アオイ環境㈱（倉地、河西）

傍聴者：1名

配付資料（当日配付）

- ・ 和光市景観計画等検討委員会（委嘱式及び第1回）議事要旨
- ・ 和光市景観計画等策定体制
- ・ 景観掘り起こしMAP【和光市】
- ・ 「平成19年度和光市民意識調査報告書」一部抜粋
- ・ 「平成16年度和光市民意識調査結果概要」一部抜粋
- ・ 「平成19年度和光市総合振興計画施策推進会議報告書 第三次和光市総合振興計画後期基本計画「5つの重点目標」に対する達成度評価・今後の方向性」一部抜粋
- ・ 「和光市後期基本計画市民ワークショップ提言書」（平成17年3月）一部抜粋

1. 委嘱式及び第1回会議の議事要旨の確認について

<確認結果>

- ・ 発言の内容については、各人が責任を持って検討し、表現が適切でない箇所を訂正することで議事要旨とすることとした。

2. 景観計画区域における良好な景観の形成に関する方針の検討について

<委員の意見>

- ・ 第1回検討委員会資料2「和光市景観計画序章、第1章及び第2章（案）」の第2章「景観計画区域における良好な景観の形成に関する方針」の構成について。冒頭に「景観づくりの目標」「基本方針」を示した上で、ゾーン別や景観軸についての「景観形成方針」を示している。あらかじめ想定した計画の構成に基づいて作られすぎているような気がする。和光市全体での景観を考えていくという意味を持たせた方がよいと思う。
- ・ 和光市は、高低差が大きく迷路状となっているイメージを抱いた。台地、低地は和光市の市域内に限ったものではなく、他の市との大きな広域的な構造の中で、川越街道があったりするような市域としての特徴をもっと組み込めたらよいかと思うが、

- どう盛り込んだらよいかがよく分からない。ゾーン別などに区切ってしまうと、要素だけを抜き出した感じとなり、和光市らしさが抜けてしまうのではないかと思う。
- ・ 和光市の地域産業である農業と、その暮らしを支えてきた屋敷林は、今でも非常に大きな景観を形成する要素だと思う。屋敷林はこの地域では特にケヤキ・ナラなどが主な種類であり、今は大きな大木となっている。その大木を切ってしまうと和光市らしさがなくなってしまう。屋敷林の形成は和光市のみでなく、朝霞市や、赤塚の方まで続いていて、地域の屋敷林というのは非常によい要素だと思う。
 - ・ 和光市の成り立ちを考えると、新河岸川の船運で栄え、江戸時代後半になって川越街道ができた。最近では、今年になって副都心線が開通した。駅前通りは、歩道が十分整備されているのは南側だけであり、北側はガードレールに挟まれた1メートル程の狭い歩道を車いすが通ったりしている。北側も南側も同様に、まちとしての景観をつくっていくことが今回の景観計画の目的だと思う。東武東上線からは、街並みが見えることがよい特徴であり、利用者にアピールできるよい点だと思う。ゾーンではなく、川、道路、鉄道などといった区分で考えていった方がよいのではないかと思う。
 - ・ 現在の和光市の景観に至る形成過程を見ると、もともと農業が主だった和光市に川越街道ができ、そういう時代から徐々に今の市街地が形成されてきたことなど、変わってきた経過についてもう少し記述を追加するとよい。このような歴史的な流れの中で将来や近未来の景観を考えていくべき。
 - ・ 和光に対しての思い入れがある人が多い。和光市は非常に小さい市であるが、北側に新河岸川、東側に白子川、西側に越戸川が流れ、中央に東上線が通るといって、分かりやすい構造である。斜面林も和光を語る上で非常に特徴的なものだと思う。都内から地下鉄有楽町線で和光市に入ると、白子の斜面林を見て非常にほっとする。埼玉県の入り口でほっとする場所が白子の斜面林だと思う。駅前の商店街は、過去の継承と若干違う意味ではあるが、未来へ向けて考えていくべき点ではないかと思っている。
 - ・ 景観は、断面での視点が必要である。この計画案は平面でしか見ていない。人間は上から見るのではなく、横から見るものである。特に和光は北向きのテラス状の構造となっているため、そういった視点が必要ではないか。
 - ・ 前回委員会において、近隣との関わりの中で、けやきの木をどうしても切らなければならないと聞いたことは非常にショックだった。この景観計画では、規制をすることは難しいであろうが、努力義務や、こうあってほしいということなどはうたっていかなければならないと思う。
 - ・ 駅前のパチンコ屋ができた時は、街並みに馴染むのかどうかセンセーショナルだった。このまちの目標として景観の中で大切にしなければいけないというものを全体的に決めていくこと、また制限しなければならないことを決めていくことが重要で

ある。

- ・ 個人宅にある緑については、公共の物の中で共有認識として、例えばケヤキ等を残していくというように指定していくことが大切だと思う。
- ・ 個人所有物について条例等で規制するのは難しいであろうから、このまちのテーマとして共通認識をもって景観づくりを進めていくことが重要だと思う。
- ・ 和光市の緑は多くが個人所有である。斜面林、屋敷林があり、個々に緑などをどう残すかについて、景観条例に規定してもよいと思う。
- ・ 一般的に行政計画において景観や他の計画を作ると、総花的で、どの自治体でも同じような計画となりがちである。検討委員会では、市民の視点から、もう少しこういった点を入れてもらおうといった重みづけを変えていくような提案をする役割ができるとうい。何を残すべきなのか、何を作っていくのかについて、和光市の和光市たる景観を明確にできるとよい。また、策定した計画の運用において、自分たちで多少動かしていくことができればよい。
- ・ 将来に残さなければいけない大切なものとして、斜面林などを残していく、さらに緑を増やしていく、生け垣を増やしていくといった方向について、景観計画の中心に据えて考えていくとよいのではないか。
- ・ 和光市は、児童文学者の大石真さんや童謡詩人の清水かつらさんを輩出している。清水かつらさんは、子どもの心のみずみずしさをすごく大事にされた方で、主に小学校の低学年の子どもたちのために童謡を残している。大石真さんは、第二次世界大戦など、昭和 20 年の価値観ががらっと変わった時期に、大人たちへの憤りを感じたようだ。戦後、早稲田大学で児童文学を学び、正義とか愛とかをどうやったら理解してもらえるかについて考え、問うた。多くの作品において、和光市のいろいろな箇所が題材とされている。彼らは白子宿との関わりがあったというが、白子宿には、湧水や緑が豊かな環境があり、それを受け入れることにより、とてもよい人情を持つということなのだろう。
- ・ 子どもたちが小さい時に培った価値観は、政治家になろうが教師になろうが、大人になっても一生持つていくものだと思う。子どもたちが生き生きとでき、ほっとでき、「和光市に帰ってきたなあ。」と思えるまちであるとよいと思う。和光市で育った子どもたちが、誇れるようなまちであるとよいと思った。
- ・ 和光市のキャッチコピーは、以前「あおさみなぎる文化都市」だったが、現在は「みどり豊かな人間都市」。今後も、すぐに変わってしまうのか気になる。
- ・ キャッチコピーは、役所が決めるものではない。逆に、和光はこういうものだという市民共通の部分がおのずと役所のキャッチコピーとして使われるだろう。
- ・ 長照寺のイチョウの木は、長照寺に任せておいてよいのか。みんなで守るとするならば、もっとみんなで考えていくことが必要だ。神社仏閣であっても市や我々が大事にしていかなければならないと思う。

- ・ 子どもたちが 20 年、30 年後に和光市の良さを理解できるための景観のあり方は、とても大事なことではある。
- ・ ゾーン別という考え方はよいと思う。例えば、駅前に緑をとすることは難しいだろう。白子宿や寺町の歴史などでは、特徴を取り上げるとよいと思う。
- ・ ソーン別に区切って考えることはよいと思うが、もともと地域が持っていた景観のつながりが切れてしまうことが懸念される。個々の特徴をつなぐストーリーがないと、全体がまとまらないというのが景観の難しいところである。
- ・ 駅北口の区画整理については、土地の買収などいろいろな課題があるだろうが、どうしたらよいのかを話し合っ、景観づくりに生かしていくべきである。
- ・ イチョウの木などの個々の要素は、景観の主演となるものであるが、個々で考えるのではなく、景観を形成する周辺の建物や地域を含めて一体的に景観を捉えることが必要だと思う。
- ・ 東上線から見える景色を「白子山脈」と言っている。東京から和光市へ帰ってくると目に入る。あれは素晴らしい景色であり、マンション等が建ってしまわないでほしいと思う。
- ・ 昔はニリンソウが咲いていた。周辺の環境とともに“ 続いているもの ” として捉えるべきだと思う。
- ・ 生活の中で、実際にどういうシーンで通りを歩くか、どういう使い方をするのかと考えると違う視点で景観を捉えることができると思う。現在は、駅から家に帰るまでの道は、豊かな気分になって帰宅できるほどのものではないと思う。
- ・ 残すべきものとして、原案に足りないと思った点は、季節を特定していないこと。夜景や四季の景色などが表現されていない。駅前から夜景を見てきたが、川越街道までは電灯と剪定された街路樹がある。パチンコ店やディスカウント店など明るい照明もあれば、マンションや事務所の下が暗いところもあるなど、あまりよいものではない。さらに、川越街道を越えると森に入ったような感じとなる。
- ・ 駅前通り商店街リニューアル委員会では、地域の方々の意見を伺いながら、提言書をまとめようと活動をしている。地域住民へのヒアリングは、商店街を中心に 7 割ほどが終了している。今後は、12 月に委員会を開催する予定で、地域住民に対するアンケートを実施することを考えている。商工会の活動については、景観計画と整合性をとりながら進めていきたいと考えている。
- ・ 商工会の各事業所では、自分たちの看板を変えることもやぶさかではないという意見がある。また、四季を感じるまちであってほしいという意見がある。春ならここ、秋ならここといったような自然の中で四季が感じられるまちであるとよいと思う。
- ・ 配付資料の市民意識調査結果によると、和光の魅力は利便性であるという回答が最も多いが、今後変わっていくだろう。
- ・ 市の北部は、昔は富士山が見えたが、現在は見えなくなってしまった。太陽光でイ

ルミネーションをつけたりすれば、北部にも市民が興味を持つことになるだろう。北部については市民の関心が低いいため、アンケートをとっても、北部についての回答が出てこないのだろう。

- ・ 街路樹のあるまち、街路樹のある商店街ということをやると面白いと思う。緑といった共通の要素で全体をつないでいくことが重要ではないか。歩道があり、緑があり、空気がきれいな和光市という観点につながっていくと思う。
- ・ 季節感のある落葉樹を植える等をするとうい。落ち葉については掃除するなどのシステムを作って行っていけばよい。地域にあった木を植えるとよい。
- ・ 落葉清掃など、管理していく上で地域住民との合意、協力することが大切。市民が景観づくりに参加できるような仕組みを含めることが重要である。景観法では、景観整備機構といって市民が参画して活動できる組織の受け皿を設けることができると定められている。
- ・ 市民の意見を聞くだけでなく、反映できるような組織を作ることが重要である。
- ・ 市民の意見を含めて検討すべき。

3．市内視察の実施について

< 検討結果 >

- ・ 検討委員会では、12月2日に市内視察を行うこととする。
- ・ 当日は、13時集合とするが、集合場所については事務局で検討する。また、事務局は、市内を車で移動するような調査企画案を立案し、各委員に伝える。

4．まとめ及び市内視察にあたっての希望

< 委員の意見 >

- ・ 景観づくりの目標の中に、「みどり豊かな人間都市、和光」とあり、また和光の市民憲章の中にも「緑」という言葉があり、緑というのは大変重要だと思う。視察の際には、ぜひ白子宿や熊野神社の辺りを見たい。
- ・ 和光市の緑は、このままでは減っていく可能性がある。景観計画では、公共的な部分で積極的に緑を増やしていく努力が必要だと思う。それに応じて、私有地の緑をどれだけ増やしていくのかについて、景観計画の中で示すとよいと思う。視察場所は、どこでも結構である。
- ・ 日常の生活に直結した景観ということが重要である。新しく景観を作るというよりも、何を残していくかが重要ではないか。個人の資産については規制できないため、緑や湧水地を市が買うような努力をする景観計画であってほしい。視察の際には、斜面林、湧水地、個人の屋敷林等、生活に直結した公共の緑を見たい。
- ・ 景観とは、個々の場所でなく、連なりをとらえてもらいたい。一番よい景色だと思うのは、地福寺の鐘である。駅前ロータリーに清水かつらの碑があるが、知らない

人が多いのもっとPRした方がよい。視察の際には、午王山、外環の桜並木を見ていただきたいと思う。

- ・ 自分が生活していく中で豊かな生活を実感できるような景観・街並みであってほしい。人に自慢できるような景観であってほしい。視察の際には、遠望できる斜面として、地下鉄の車窓から眺め、川向こうから来た時に見える斜面林の意味を感じたい。
- ・ 視察の際には、市民が人に絶対に見せたくない、一番劣悪な部分を見たい。

以 上